

不定語イカデの疑問用法をめぐって

越智, 隆伸
佐賀県立佐賀西高等学校教諭

<https://doi.org/10.15017/9398>

出版情報 : 語文研究. 85, pp.12-24, 1998-06-05. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

不定語イカデの疑問用法をめぐって

越 智 隆 伸

1 問題の所在

不定語¹イカデには、疑問、反語、希望の三つの用法がある。

[疑問]

- 1 わかるればまづ涙こそ先にたていかでおくる袖のぬるらん
(拾遺集 324)

[反語]

- 2 別ぢは渡せる橋しもなきものをいかでかつねに恋ひ渡るべき (同上 318)

[希望]

- 3 いかでかの年ぎりもせぬ種もがな荒れたる宿に植ゑて見るべく
(後撰集 1109)

本稿は、そのうちの疑問用法について論じるものである。³

イカデについての研究は、夙に『今昔物語集』(以下、『今昔』と略称)のイカデを論じた船城 1969 をはじめ、近年では磯部 1988、于 1996 などがある。しかし、イカデの疑問用法そのものについては、さらに論ずべき余地があると思う。以下、次に述べるような観点から論をすすめていきたい。

(1) イカデが共起する疑問表現は、用例 1 のような「ナゼ…」という、原因・理由に関するものだけでなく、用例 4・5 のように、手段・方法についての疑問をあらわすものがある。

- 4 恋ひつつも今日は暮らしつ霞立つあすのはる日をいかで暮らさん
(拾遺集 695)

- 5 平中ガ云ク「…藤大納言ノ北ノ方コソ実ニ世ニ不似ズ、微妙キ女ハ御スレ」ト。大臣ノ宣ハク「其レハ何デ被見シゾ」。平中ガ云ク、「其ニ候ヒシ人ヲ知りテ候ヒシガ、申候ヒシ也。…」
(今昔 卷廿二 8)

両者はどのような関係にあるのだろうか。

(2) (1)に関しては、イカデを「イカニテの約」とする説があり、⁴これに従うならば、イカデは語構成要素として「ドノヨウニ」という意味の不定語イカニを含む。そうすると「ドノヨウニシテ・ドウヤッテ」という、手段・方法に関する疑問の用法こそが、イカデの本来的・中心的用法だということになり、イカデが「ナゼ」をあらわしうること自体問題になってくる。

(3) だが、『今昔』では、船城 1969 が指摘したように、原因・理由に関する疑問表現に使用される不定語として最も多くイカデが使用されている。上代にイカ

デの確例がなく、上代・中古の原因・理由の疑問表現に主として用いられるのがナド・ナゾといった不定語であることを考えれば、ナド・ナゾ等を凌いでイカデが使用されている『今昔』は突出した資料だといえる。たとえば、『源氏物語』（以下、『源氏』と略称）と『今昔』におけるイカデを比較した場合、下表にみるように、『今昔』で原因・理由に関する疑問用法の割合が高くなっていることが、『今昔』におけるイカデ隆盛の一要因として考えられる。

	手段・方法	原因・理由
『源氏』	39	29
『今昔』	8	41

イカデの原因・理由用法が『今昔』で増加したのは、どのような経緯があったのか、文法史的な説明が必要だと思う。

以下、上の(1)～(3)についてそれぞれ論じていくことにする。なお、本稿が用いた資料等の詳細については、後に一括して示す。

2 「手段・方法」と「原因・理由」とのかかわり

まずは(1)についてである。「なぜ」と解釈できるイカデは、古くは中古の資料からみえるので、中古の「ドノヨウニシテ」という疑問用法の例と比較しながら両者の関係をさぐっていかうと思う。ここでは、以下に示す、手段・方法に関する疑問の用例 6～9 に着目したい。

- 6 忍びてと思へば、はらからといふばかりの人にもしらせず、心一つに思ひたちて、明けぬらんと思ふほどに出で走りて、賀茂川のほどばかりなどにて、いかで聞きあへつらん、追ひて物したる人もあり。

(蜻蛉日記 天禄元年七月)

- 7 「あやしの男や。一人して二人が物をば、いかで持たるべきぞ。一升瓶に二升は入るや」

(枕草子 108 段)

- 8 大臣は、寝殿に離れおはしまして、承和の御いましめの二つの方を、いかでか御耳には伝へたまひけん、心にしめて合はせたまふ。

(源氏 梅枝)

- 9 「…その後、音にも聞こえじ、と思してやみにしを、いかでか聞かせたまひけん、ただ、この二月ばかりより、訪れきこえさせたまひし。…」

(同上 蜻蛉)

これらはすべて、話し手の予想・期待と齟齬する事態が発生した（しようとする）場面での使用例である。用例 6 は、誰にも知らせずに家を出てきたため、追ってくる人などあるはずないと思っていたところへ、誰かが聞きつけて追いかけて

きた場面である。ここでは、「はらからといふばかりの人にもしらせず」と、「聞きあへつ」という内容が矛盾・齟齬の関係にある。用例9は、一人で二人分の荷物など持てるはずがないのに、それを持つと人に対して発せられたものである。「一人」と『二人が物を』持つということが撞着している。ここに挙げた例は、整理すると次のようになる。6' ~9' における a, b は、互いに矛盾・背離・齟齬の関係にある。

6' a 「はらからといふばかりの人にもしらせず」⇔b 「聞きあへつ」

7' a 「一人」⇔b 「二人が物を」持つ

8' a 「承和の御いましめの二つの方」⇔b 「御耳には伝ふ

9' a 「音にも聞こえじ、と思してやみにし」⇔b 「聞かせ給ひけん」

下の10は、このことを図示してまとめたものである。

10 [a (→予想事態)] ←【矛盾・背離・齟齬】→ [b]

紙幅の都合上これ以上の挙例は割愛せざるをえないが、「ドノヨウニシテ」と解釈できるイカデは実際にこういった場面で多く使用されている。

ここで注目すべきは、本稿の管見に入った中古のイカデのうち、「なぜ」と解釈できる例のほとんどが、上にみた「ドノヨウニシテ」という疑問の例と同様の形に整理できることである。『源氏』から例を挙げて説明しよう。

11 あやしう夜深き御歩きを、人々「見苦しきわざかな、……昨日の御気色のいと悩ましう思したりしに、いかでかくたどり歩きたまふらん」と、嘆きあへり。(夕顔)

12 兵部卿宮は、いとあてになまめいたまへれど、にはひやかになどもあらぬを、いかでかの一族におぼえたまふらむ、ひとつ后腹なればにや、など思す。(若紫)

用例11は、女房たちが、源氏の「夜深き御歩き」を知った場面である。源氏が深夜に忍び歩くという事態は、源氏が昨日気分がすぐれなかったことを知っている女房たちにしてみれば、予想に反する出来事だといえよう。ここでは、次のような a と b が矛盾・齟齬の関係にある。

a 「昨日の御気色のいと悩ましう思したりし」

b 「かくたどり歩きたまふ」(/ 「あやしう夜深き御歩き」)

用例12は、藤壺に似た紫の上を目にした源氏の心内文である。紫の上の父にあたる兵部卿宮の容貌から考えれば、紫の上が藤壺に似ていて美しいというのは、予想通りのありようとはいえないだろう。ここでも、下に示した a と b の二つが互いに矛盾するとみてよい。

a 「兵部卿宮は、いとあてになまめいたまへれど、にはひやかになどもあらぬ」

b 「(紫の上は) かの一族におぼえたまふ」

以上は『源氏』からの挙例であったが中古において「ナゼ」と解釈できるイカデのほとんどの用例は、ここにみたように、二つの事態・要素が抽出できる。この両事態・要素の関係は、(a) ある一つの先行する事態、そして、(b) そこからの順当な期待(予想事態)に一致しない事態というものであり、ここでも、先に示した図式 10 があてはまる。

ただし、すべての用例において、明記されている事柄だけから、互いに矛盾する a・b を抽出できるわけではなく、文脈による推測の助けを要するものもある。たとえば、用例 12 でも文脈に依存する部分が若干あるし、また、下の用例 13 の場面でも、

13 まかで給て、宰相に、「ありつる事いとよく言ひつ」と宣へば、「いであな痴れがましや」、いと心づきなうおぼして、「いかに『言ひつ』とは申し給ぞ。それはかたじけなき人を」 (栄華物語 巻一)

動作の及ぶ対象が中宮でありながら、謙譲語を用いていないことを汲み取らねばならない。しかし、ほとんどはこのように推測に難くないものばかりである。ちなみに用例 13 では、(a) 中宮の身分の高さに対して、(b) 「『言ひつ』と」敬語なしで言ったことが話し手の順当な期待に矛盾することになる。

以下、参考までに若干の用例とそこにみられる矛盾する a・b をあわせて示しておこう。

14 「年比しひまどひ給へる中納言は、いかにかく時の人を婿にてもたりけん。幸人にてこそ有けれ」といひあさむ。 (落窪物語 巻三)

15 「いみじく思へるなる仲忠がおもてぶせなる事は、いかに啓したるぞ。…」 (枕草子 86 段)

16 水もなく舟もかよはぬこのしまにいかにかあまのなまめかるらん (後撰集 378)

14' a 「年比しひまどひ給へる中納言」 ⇔ b 「時の人 (を婿にてもたり)」

15' a 仲忠を「いみじく思へるなる」清少納言 ⇔ b 「仲忠がおもてぶせなる事」

16' a 「水もなく舟もかよはぬこのしま」 ⇔ b 「あまのなまめかる」

ではここで、これまで述べてきたことをまとめてみる。中古の資料において、「ナゼ」と解釈しうるイカデと、「ドノヨウニシテ」と解釈できるイカデとは、使用場面や文の構造が等しい。つまり両者は連続するものであるといえる。このことは、「ナゼ」とも「ドノヨウニシテ」とも解釈できる次の例において最も顕著にみてとれると思う。

17 御心の中なりけんこと、いかに漏りにけむ (源氏 花宴)

用例 17 は、「心の中のことがドノヨウニシテ漏れたのだろう」とも「ナゼ漏れた

のだろう」ともどちらの解釈も可能である。しかし、話し手の予想や期待に反するような出来事が生じている場面であることに変わりはない。用例 17 は、次のような形で矛盾・齟齬が認められる。

17' a 「御心の中なりけんこと」⇔b 「漏りにけむ」

3 「ナゼ」の来由

ここで、これまでの考察に語源的観点を加味すると、「ナゼ」と解釈できる中古のイカデは、畢竟「ドノヨウニシテ」という疑問の用法に包摂されることになる。そうするとやはり、このような性質をもつイカデが何故に「ナゼ」をあらわすのかという、先ほどの(2)が問題になってくる。本節ではその事情をあきらかにしたいと思う。まずは、「ドノヨウニシテ」と解釈できるイカデについて、疑問の性質を考察することからはじめる。

手段・方法に関する疑問のイカデは、用例 6~9 をみればわかるように、「聞き」「伝へ」などといった、動詞があらわす動作や作用のあり方を修飾している。つまり、「ドノヨウニシテ」というイカデの疑問は、動作・作用がいかなる過程を経て実現するかという動作・作用の過程を問題にする表現であるといえる。

一方「ナゼ」と解釈できるイカデが修飾するのは、動詞にとどまらず、その対象はもっと広いように思う。用例 11 を例にとって具体的に観察してみると、イカデが修飾しているのは「たどり歩き」という動作内容ではなく、大雑把に言うと、イカデに後続する表現「かくたどり歩きたまふらん」全体であろう。話し手の予想に反して生起した事態まるごとだといってもよい。ここで、「ドノヨウニシテ」という疑問用法との連続性、そして、先にみた「ドノヨウニシテ」という疑問の性質を敷衍すると、「ナゼ」と解釈できるイカデは、ある事態が「ドノヨウニシテ」生起し実現しているのかという、事態成立の過程を問題にする表現であろうということは想像に難くない。では、事態成立の過程を問題にすることが、どのようにして「ナゼ」という疑問に繋がっていくのであろうか。

再び用例 11 を例にとる。ここには「昨日の御気色のいと悩ましう思したりし」という、言語主体である女房たちが発話時以前に知覚した既定の事態がある。そして眼前に源氏が「たどり歩きたまふ」というもう一つの既定事態が起り、前提となる発言時以前の事態やそこから予想される事態と矛盾してしまう。女房たちにとって、前提事態と眼前の事態は、ともに直接自分で経験した事態であり、両事態の存立についてはもはや疑いようがない。ここで疑うことができるのは、前提事態からの予想を反してでも、眼前の事態が成立しえた過程そのものである。それはとりもなおさず、両事態の因果関係を模索することであり、「ナゼ」という疑問に繋がっていくのだと解される。

以上、イカデに「ナゼ」の解釈を生む要因として、二つのことを述べた。一つ

は、「ナゼ」と解釈できるイカデが、後続する表現全体を修飾するということ、そしてもう一つ、その用例中に、互いに矛盾する二つの事態が存するため、因果関係が把握できないという点である。なお、後者に関しては、心理学の立場から安西 1985 が述べた、以下の引用が大いに参考になると思う。

私たちは、身のまわりで起きるできごとを、いつも因果的に関連づけて理解している。…略…そして、あるできごとが起きたとき、それが因果的に予想通り起きたのならそれでよい。しかし、起きたできごとが自分のすでに持っている因果関係の網の目にかからないときには「なぜ」という疑問が自然に湧いてくる。

4 イカデの表現性

以上の検討から、中古のイカデは、元来が原因・理由の疑問に使われるための形式ではないと考えられる。したがって、そこにあらわされている「ナゼ」の表現性も、上代から存し、中古で多用されるナドとは必ずずから違ったものになっていることを述べておきたい。

イカデの表現性については磯部 1988 に詳しく論じられたが、なお修正すべき点があるように思う。磯部 1988 は、イカデの疑問表現を、文末が推量の助動詞で結ばれる場合と、終助詞ゾによって結ばれる場合とに大別した上で、

18 さしも、いかでか、世を経て心に離れずのみはあらむ。なほ浅からず言ひそめてし事の筋なれば、なごりなからじとにや」など見なしたまへど、
(源氏 東屋)

19 「容貌はいとかくめでたくきよげながら、田舎びこちごちしうおはせましかば、いかに玉の瑕ならまし。いで、あはれ、いかでかく生ひ出でたまひけむ」と、おとどをうれしく思ふ。……筑紫を心にくく思ひなすに、みな見し人は里びにたるに、心得がたくなむ。
(同上 玉鬘)

20 「かかる所にいかで年を経たまふらむ」など、うち涙ぐまれたまへるを、いと恥づかしと聞きたまふ。
(同上 総角)

前者についてはこのような例を挙げ

言語主体内部の『疑い』の表現であり、相手に対して、積極的に問いかけるという性格のものではない

と述べ、後者については以下のような例を示して、

21 「あな、今めかし。この君や世づいたるほどにおはする、とぞ思すらん、さるにては、かの若草を、いかで聞いたまへることぞ」とさまざまあやしきに、心乱れて、
(同上 若紫)

22 右近出でて、このおとなふ人に「……あさましうめづらかなる御ありさまは、さ思しめすとも、かかる御供人どもの御心にこそあらめ。いかで、

かう心幼うはるたてまつりたまひしぞ。なめげなることを聞こえさする山
がつなどもはべらましかば、いかならまし」と言ふ。 (同上 浮舟)

23 「彼の花は失せにけるは。いかで、かうは盗ませしぞ。いとわろかりける
女房たちかな。いぎたなくて、え知らざりけるよ」とおどろかせ給へば、
(枕草子 278 段)

事実そのものに対する、言語主体のあやしみ・いぶかり・とがめ・責めなど
の気持を表した、一種の感情表現としての性格が強い

また、

会話でもちいられ、直接相手の動作・行動に対して使われるとき、それは相手
に対する批難・責めを表明したものになっている

と述べた。この、イカデの疑問表現が解答を要求する質問表現として機能しない
ことを主張した指摘自体は従うべきものではあるが、イカデに表現価値が生じる
理由については納得のいく説明が何もない。磯部 1988 は、この点に関して「『い
かで』自身の持つ主体的性格の強さ」という概念によって説こうとするが、しか
し、そういう概念を導入したところで、イカデの疑問表現に、「あやしみ・いぶか
り・とがめ・責め」などといった具体的な表現価値・情意が付与される要因が明
らかになるわけではない。

また、磯部 1988 は、記述に際して文末の要素によって区別する方法をとった
が、これではイカデ自身が持つ表現性の本質を見失いかねないと思う。現に「相
手に対して、積極的に問いかけるといふ性格のものではない」として挙げられた、
推量の助動詞を伴う例 18～20 からも、なにがしかの情意が感じられる。たとえ
ば、用例 18 は、亡き大君への思いが断ち難くて思いつめる薫の様子を見た「中の
君の発話内容である。これ以前にも、中の君は同様の事情で思いつめる薫をたし
なめており(宿木)、ここでは、一度たしなめられたにもかかわらず、再び薫が同
じ状態にあることへの「とがめ」の気持ちを読み取れる。また、用例 19 におい
ては、一緒に筑紫に下った人たちがすっかり田舎じみているにもかかわらず、玉蔓
一人が「田舎びこちごちし」くないことに対する「言語主体のあやしみ・いぶか
り」が感じられ、これらは、磯部 1988 が用例 21～23 において指摘した「あやし
み・いぶかり・とがめ」の情意とさほど違いがないように思われる。イカデの疑
問表現は、つまるところ、文末の要素にかかわりなく、基本的に何らかの情意を
含んだ「一種の感情表現に近い」表現性を有するものであり、終助詞ゾはそれを
一段と強く感じさせているだけだと考えるべきである。少なくとも、終助詞ゾそ
のものには、「いぶかり・責め」などといった意味はないであろう。⁸

以下、イカデの疑問表現がある種の情意を必然的に帯びる仕組みを明らかにし
ていくが、まずは、イカデの疑問表現に付随する情意の基本的性格をきちんと把
握しておこう。

磯部 1988 には、「あやしみ・いぶかり・とがめ・責め」、「相手に対する批難」といった、いわばマイナスの感情としての具体的な記述があった。しかし、以下の例では、

24 果てて、酒飲み、詩誦などするに、頭の中將齋信の君の、「月秋と期して身いづくか」といふことをうちだし給へりし、はたいみじうめでたし。

いかで、さは思ひ出で給ひけん。 (枕草子 135 段)

25 いかなるすき者ならむ、と思されて、所もげによきわたりなれば、ひき寄せさせたまひて、「いかで得たまへる所ぞと、ねたさになん」とのたまへば、 (源氏 葵)

「いみじうめでたし」「ねたさになん」という文中の語句からもわかるように、「賞賛」「羨望」といった、プラスの情意が示されている。結局、イカデの情意の性質がプラス・イメージになるか、マイナス・イメージになるかといったことは、使用場面に反映されるものでしかないということである。ここで、イカデの疑問表現における情意の基本的性格を明らかにするために、表現性の観点から、イカデの使用場面を詳しく見直してみる必要があるように思う。

疑問表現におけるイカデが、話し手の予想に反する出来事が生じた場面で用いられることは前にみた。したがって当然、イカデの用例には、言語主体が「予想」をたてる際に前提とした事態と、その「予想」に矛盾する事態という二つの事態を確認することができる。

ここでは、この二つの事態のあり方が、「驚き」を発生させる要素として作用することに注目したい。近藤 1988 は「驚き」を生じさせる要因の一つとして、事態の「意外性」をあげ、次のように述べている。

何もないところに新奇のAが現れても「眼を見張る」のに、Bが見えるはずだとBの残像ならぬ「予像」を見ている予期の眼に、Aが現れるのであるから、「眼を疑う」強い驚きとならざるを得ないのである。

また、安西 1985 によれば、人間は「自分の持つ因果関係の一貫性を崩さないようにする傾向があり、新しく得られた情報…略…をもとにして、新しく因果関係をつくりだすことはなるべくやらずにすませたがる」とのことである。この指摘を古代日本人にも通用するものとして考えておくと、イカデが使用される場面における言語主体の思考法は、先行する事態を「因」とするものとなる。そういう思考の方法をとる限り、「果」となるはずのないものが順当な因果関係をふみにじて眼前に生じたことに対しては、「強い驚き」あるいは「意外」「予想外」といった気持ちが必然的に生じてくると思われる。

つまり、イカデの用例に認められる二事態の関係こそが、「強い驚き」の気持ちを生むのである。よって、イカデの情意の基本的な性格は、イカデの使用場面における事態の「意外性」が必然的にもたらす、言語主体の「(強い)驚き」という

観点から一括して把握できるのではないかと考えられる。磯部 1988 が、「あやしみ・いぶかり・とがめ・責め」、「相手に対する批難・責めを表明し」たものとして挙げていた用例 21～23 をここで再度見直してみよう。

用例 21 は、これ以前の箇所にも、尼君と女房が歌を唱和し、それをふまえて源氏が和歌（「はつ草の若葉のうへを見つるより旅寝の袖もつゆぞかわかぬ」）を詠んだという事態が生起していることが記されている。尼君は女房との唱和のあと、僧都から「外からまる見えだ」と忠告されてはじめて、「あないみじや。いとあやしきさまを人や見つらむ」と言って簾を下ろしており（若紫）、その発言内容から、尼君は、自分たちの唱和の様子が外から見られていたとは思っていないことが窺えるだろう。「見られていないであろう」という尼君の予測からいって、唱和の様子を見ていなければ詠めないはずの和歌を源氏が現実にも詠んだというのは、まさに「予想外」の「驚き」として把握できるものである。

用例 22 は、右近の不注意で浮舟と契る機会を匂宮に与えてしまい、その翌朝になっても、匂宮が帰宅しようとしないう場面でも右近が発話したものである。右近は、たとえ匂宮が逗留を決断したとしても、それは供人の気持次第で拒絶できると考えている。したがって、匂宮の逗留が確実な事態というのは、「予想外」であるといえ、「驚き」をもたらす。

用例 23 は、昨日まであった桜の木が、朝起きてみると根こそぎなくなっている場面である。自然の風物のように、いつもそこにあるはずと思っているものが跡形も無くなるというのは、「予想外」の「驚き」に値するであろう。

要するに、イカデの疑問表現が有する情意の基本的な性格としては、上にもてきたような、「予想外」の事態に遭遇した言語主体の「驚き」が根本にあり、それが各々の場面に応じて、具体的な情意となってあらわれているといえる。例えば、用例 22 では、右近にとって匂宮逗留という事態が、「驚き」であると同時に不快なものであったために「とがめ・責め」となり、用例 25 においては、「驚き」であり、かつ、羨ましい事態であったために「羨望」の気持ちが出てきているというように理解してよい。

以上、中古におけるイカデの疑問表現が何らかの情意を帯びることの原因が、イカデの使用条件に起因することをあきらかにした。イカデの疑問表現は、「予想外」の事態にでくわした際の言語主体の「驚き」を表しており、その情意が使用条件あるいは文構造に由来するものであるために、必然的に「感情表現に近い」表現とならざるを得ないのである。

したがって、たとえば、次の現代語における例 26 のように、

26 なぜ、地球は丸いのですか。

事態成立の原因・理由に関する疑問表現であっても、使用場面に齟齬や矛盾が認められない場合には、中古においてイカデは用いられず、そのかわりに、不定語

ナドが用いられていたと思われる。

- 27 尚侍の君いとわびしう思されて、やをらるざり出でたまふに、面のいた
う赤みたるを、なほ悩ましう思さるるにやと見たまひて、「など御気色の例
ならぬ。物の怪などのむつかしきを。修法延べさすべかりけり」とのたま
ふに
(源氏 賢木)

用例 27 では、たとえば、物の怪退散のための修法を現在行っているにもかかわらず、その予想に反して物の怪の仕業で顔色が悪いといった、イカデにみられた「予想外」の事態に遭遇した「驚き」はないように思う。ただ、純粹に顔色がいつもと違うことの原因・理由を追求した例であろう。¹⁰

5 『今昔』のイカデ

しかし、本稿の冒頭でとりあげた『今昔』には、中古のイカデに必然的に付随していた情意が認められず、解答を求める質問表現として使用されている例が存する。¹¹

- 28 春二月許ニモ成ヌト思ユル程ニ、郷ノ人等此ノ山ニ自然ラ来ル。盲僧
「人来ル也」ト喜ビ思フ程ニ、郷人等、盲僧ヲ見テ問テ云ク、「彼レハ何者
ゾ。何デ此ニハ有ツルゾ」ト怪ビ問ヘバ、盲僧前ノ事ヲ不落ズ語テ、住持
ノ僧ヲ尋テ問フニ……
(卷十三 18)

- 29 陽信ハ「留テ、僧ノ返ラム所ニ仰ギテ語ハム」ト思ヘバ、暫ク留テ居タ
ルニ、僧拈畢テ、蓑打着テ、郷ニ不留ズシテ去ナムト為ル気色有レバ、陽
信、寄テ、僧ニ、「此ハ何デ此クハ御スゾ」ト、事ノ有様ヲ委ク問フニ……
(卷十四 44)

この現象は、話し手の予想と矛盾するような出来事が起こった場面がなくても、イカデによって、眼前に生じた事態の成立の原因や理由を問うことができるようになったことを示すものだと解される。前に示した図式 10 でいうならば、a の部分が消滅したことになる。

なお、イカデが質問文として機能する例は『今昔』だけではなく、『大鏡』や『宇治拾遺物語』においても見受けられる。

- 30 「いづれの国の人ぞ」と問ふ。「陸奥国安積の沼にぞ侍りし」といへば、
「いかで京には来しぞ」と問へば、「その人とは、え知りたてまつらず、歌
よみたまひし北の方おはせし守の御任にぞ、上りはべりし」といふに、
(大鏡 下)

- 31 「まことにや、この虎の人くふを、やすく射むとは申なる」と問はれ
れば、「しか申候ぬ」とこたふ。守「いかでかゝる事をば申すぞ」と問へば、
此男の申すやう、
(宇治 155)

『今昔』におけるイカデの隆盛は、文体的特徴のみならず、ここに述べたような

文法的事実もその背景にあるのではないだろうか。

6 おわりに

ここまで述べてきたことで、本稿冒頭の(1)~(3)に述べた疑問や問題提起についてはすべて解答を付与し得たと思う。最後に、上代から中世までの、原因・理由に関する疑問表現に用いられる不定語の史的変遷について簡単に触れて終わりにしたい。

上代における原因・理由の疑問表現に用いられる不定語は、ナド・ナゾ・ナニカなど、語構成に「ナニ」を含むものばかりである。中古でもそれらは引き続き用いられるが、そこに、「ナゼ」と解釈できるイカデが登場してくるのである。この現象をとらえて、「イカニ類のナニ類に對する一方的な侵犯」と記述したのが木下1969であった。

たしかに中古のイカデは「ナゼ」と解釈できるものではある。だが、本稿において考察したように、それは表現価値を伴った表現であるため、すでに中古において、イカニ類がナニ類を「侵犯」してしまったとみるのは早計にすぎよう。完全な「侵犯」は、イカデが質問文として用いられる『今昔』『宇治』の頃まで、その時期を遅らせる必要があるだろう。

だが、このイカデによる「侵犯」も、『平家物語』（覚一本）のイカデが用例32のように「イカデカ」の形で反語用法として固定化していく¹²ことを思えば、イカデが原因・理由を問う質問文として使用された時期、つまり「侵犯」の期間はほんの僅かであろうと予想される。

32 「平家の悪行なかりせば、今此瑞相をいかでか拜むべき」とて、おとゞ感涙をぞながされける。 (卷三 大臣流罪)
また、一方のナニ類ナドも、『平家物語』『保元物語』では、「ナド…否定辞」という用法で固定化するとみてよいし、

33 祇王とかふの御返事にも及ばず。入道「など祇王は返事はせぬぞ。まいるまじひか。參るまじくはそのやうをまふせ。…」とぞの給ひける。
(平家 祇王)

34 「夫和光同塵の方便は、抜苦与樂の為なれば、大慈大悲の神慮のたすけ、
などかあはれみ給はざらん。そのやくなんをすくはせましますん事、尤権
現の本誓也。…」 (保元 上)

『史記抄』において、

35 世家ハ列国諸侯ヲ載ルニナセニ外戚ヲハ入タソ (卷二)
「ナニセムニ」の約とされる¹⁴、ナニ系のナゼニがまま見出せることを考えあわせれば、結局、原因・理由を問うための不定語は、上代以来中世に至るまで、基本的にナニ類が担当してきたといえる。よって、イカデによって引き起こされた

「イカニ類のナニ類に對する一方的な侵犯」は『今昔』『宇治』あたりで発生した、いわば「突発事故」とでもいふべきものとして位置づけられると本稿は考える。

〈注〉

- 1) 「不定語」の用語およびその定義については、尾上 1983 に従う。
- 2) イカデには「いかで」「いかでか」「いかでかは」の三つの語形があるが、本稿ではそれらを特に区別せず、総称してイカデと表記する。
- 3) イカデの三用法における相互の意味関係については別稿を用意している。
- 4) 木下 1962、『角川 古語大辞典』など。
- 5) 木下 1962 参照。
- 6) 磯部 1988 から抜粋して引用した。用例 21～23 も同様。
- 7) 于 1996 にも同様の指摘がある。
- 8) 森野 1992 参照。
- 9) 磯部 1990 は終助詞ゾで結んだ疑問表現の例を挙げ、それが感情表現であることを述べ、さらに、「その感情は、波線部からも明らかなように、後悔、驚き、あきれ、困惑、悲嘆などの、いわばマイナスの感情ばかりである。このことは、前稿（越智注一磯部 1988）ですでに考察した、次のような「いかで」が「ゾ」と呼応する場合も同様であった」と、明確に「マイナス」として記している。
- 10) ただし、ナドにも、イカデと同じように齟齬がみとめられる例もある。

大臣北の方の、さばかり立ち並びて頼もしげなる御中に、などかうすずろごとを
思ひ言ふらん、とあやしきにも、（源氏 竹河）

これは、大君の発言である。少将の両親は健在でしかも「頼もしげなる御中」であるのに、少将が「すずろごとを思ひ言ふ」ことが、親をなくした大君にとっては「予想外」といえる。
- 11) すでに磯部 1988 に同様の指摘がある。
- 12) 磯部 1988 の指摘。
- 13) 原 1974 の指摘。
- 14) 大坪 1983 参照。

〈補注〉

1. 本稿が調査・引用に使用したテキストは以下のとおり。ただし、引用に際しては、私意によって、表記を改め、句読点・カギ括弧などを付加した部分がある。また、引用文中の下線は、とくに断らないかぎりすべて本稿によるものである。
- 伊勢物語・大和物語・平仲物語・落窪物語・狭衣物語・栄華物語・枕草子・今昔物語集・宇治拾遺物語・平家物語・保元物語……『日本古典文学大系』岩波書店。
 - 竹取物語・紫式部日記……『新日本古典文学大系』岩波書店。
 - 源氏物語……池田亀鑑『源氏物語大成』中央公論社。
 - 蜻蛉日記……佐伯梅友・伊牟田経久編『改訂新版かげろふ日記索引本文編』風間書房。
 - 大鏡……秋葉安太郎『大鏡の研究 上巻 本文篇』桜楓社。

- 古今集・後撰集・拾遺集・後拾遺集……『新編 国歌大観』角川書店。
 ○史記抄……『抄物資料集成』清文社。

2. 用例の解釈にあたっては、現行の注釈書類に負うところが大きい。なるべく数多くのものをみるように努めたが、本稿の筆者による解釈も判断材料の一つとして含めている。

〈参考文献〉

- 安西祐一郎 1985『問題解決の心理学』中公新書 757 中央公論社。
 磯部佳宏 1988「不定語「いかで」の構文的性格—意味用法・表現性をめぐって—」『山口国文』11
 ————1990「中古和文の要説明疑問表現—『源氏物語』を資料として—」梅光女学院大学『日本文学研究』26
 ————1991「『今昔物語集』の要説明疑問表現—「疑問詞—ニカ。」形式を中心に—」『日本文学研究』27
 ————1992「『平家物語』の要説明疑問表現」『辻村敏樹教授古稀記念 日本語史の諸問題』明治書院。
 于 康 1995「「など」「などか」の意味用法とその変遷」『国文学攷』147
 ————1996「中古和文における「いかで」「いかに」「いかが」の機能」『山口国文』19
 ————1997「日本語に於ける不定語の構文的機能に関する歴史的研究—副詞的不定語を中心に—」未刊学位請求論文（広島大学）
 大坪併治 1983「漢文訓読文におけるナゼニの成立をめぐって」『国語学』132
 尾上圭介 1983「不定語の語性と用法」渡辺実編『副用語の研究』明治書院。
 河村幸枝 1994「「いかで」の用法と結びについて」『解釈』40-2
 木下正俊 1962「「なに」と「いかに」と」『萬葉』44
 近藤良樹 1988「驚きの感情—その認識作用面の分析—」『佐賀大学教育学部研究論文集』36
 -1
 中右 実 1980「文副詞の比較」『日英語比較講座 第2巻 文法』大修館書店。
 原 栄一 1974「平家物語副詞覚書（その1）—今昔物語集との比較から—」『金沢大学教養部論集』11
 船城俊太郎 1969「今昔物語集の疑問副詞「何ソ」「何ト」「何テ」」『国語学』77
 南不二男 1985「質問文の構造」『朝倉日本語新講座 4 文法と意味』朝倉書店。
 森野 崇 1992「平安時代における終助詞「ぞ」の機能」『国語学』168
 山口堯二 1983「疑問表現の情意」『大阪大学教養部研究集録 人文・社会科学』32（山口 1990 所収）
 ————1989「疑問表現の推量語」『国語と国文学』66-7（山口 1990 所収）
 ————1990『日本語疑問表現通史』明治書院。